

宇都宮大学国際学部国際社会学科

2018 年度 卒業論文

音楽からつくるまち ―音楽フェスティバル
を活用した地方活性化の可能性―

指導教員：中村祐司

学籍番号：

論文執筆者：

要約

本論文では、地域活性化の手段としての音楽フェスティバルの在り方を論じていく。

第 1 章においては、日本国内での地方の置かれている状況や、そこで実施されている方策などに関して分析をし、新しい方策として音楽フェスティバルを活用していくことを提案していく。衰退という状況に置かれる地方が実施し続けてマンネリ化してしまった方策から抜け出すために、音楽フェスティバルを活用していくことの必要性に関して言及する。

第 2 章においては、先行研究の検討を行う。地域で音楽フェスティバルに関しての目指すべき運営方法や、音楽フェスティバルが地域にもたらす経済波及効果に関する研究、音楽フェスティバルに参加する人々に心理的な面からアプローチした研究などについて分析をし、音楽フェスティバルは地域活性化に貢献できるのか、そして実際に地域に貢献していくのに必要な事項は何かということについてまとめる。

第 3 章においては、音楽フェスティバルの現状や地域への効果とその具体例に関して言及していく。近年音楽フェスティバルは増加しているが、なぜそれは増加しているのか、実際にどのようにして地域に貢献しているのかを具体例をもとに述べていく。具体例は、長年開催されている大規模な野外音楽フェスティバルとして「フジロックフェスティバル」を、比較的歴史が浅く中規模な音楽フェスティバルとして「私立恵比寿中学の秋田分校」を用いた。

第 4 章においては、筆者が実際に参加し、現地調査を実施した音楽フェスティバルに関して、そこでの調査結果や経験を述べていく。日本最大級の音楽フェスティバルとして「ROCK INN JAPAN 2018」、地方の商店街で行われた小型の音楽フェスティバルとして「MIYA JAZZ IN 2018」の 2 つの分析と検討を行い、規模、開催地、地域との協力などの面から地方における音楽フェスティバルの運営に関して検討していく。

目次

はじめに	3
第1章 日本の地方の活性化活動に関して	
第1節 地方の状況	6
第2節 マンネリ化しつつある地方の活性化事業	6
第3章 新たな地方活性化事業の必要性	6
第2章 先行研究の検討	
第1節 郊外型音楽フェスティバルと都市型音楽フェスティバルの比較	8
第2節 音楽フェスにおける協力体制の確立と地域への効果	9
第3節 音楽フェス参加者の心理的状況	9
第3章 音楽フェスティバルと地方での実例	
第1節 日本で増加している音楽フェスティバル	11
第2節 地方密着型音楽フェスティバルの地域への貢献	11
(1) フジロックフェスティバルの事例	12
(2) 私立恵比寿中学秋田分校の例	13
第4章 地方で開催される音楽フェスティバルでの実際	
第1節 「ROCK INN JAPAN 2018」での実感	15
第2節 「MIYA JAZZ IN 2018」での実感	16
おわりに	19
あとがき	21
参考資料	22

はじめに

ここ何年も地方では衰退が進行しており、各地方自治体は地域活性化に躍起になっている。少子高齢化、若者の都市部への流出など、多くの地方で似たような問題を抱えているため、問題の解決に使われる手段や事業は各地で似たり寄ったりのものになっている。その例が人口減少に対する解決法である。これは各地で大きな問題となっており、地方自治体はUターン政策や移住の推進政策などを行っている。しかし、地方には働く場所が少ないという理由から移住者はそれほど増えず、結局は問題の解決には至っていない地方が多いというのが現状である。

このような現状を見て、私は地方の市町村が衰退という問題を解決でき、なおかつ長期的な活性化を可能にする新しい解決法や事業を見つけていく必要があると考えた。加えて、地方自治体などが行っている支援金の配給や住宅補助などの生活面で支援するような政策ではなく、娯楽の面で人々の興味を引けるような政策があった方が、その地方のアピールに繋がるのではないかと考えた。そこで私は、音楽、とくに音楽フェスティバル（以降音楽フェスと呼ぶ）に着目した。

私は大学の軽音楽サークルで活動しており、その活動の延長としていくつかの音楽フェスに参加した。それらに参加するにあたって感じた音楽フェスでのエネルギーやパワーが音楽を楽しむということ以外にも有効活用できないかと考えていたところ、いくつかの音楽フェスは地方活性化のために開催されているということを知った。しかし、それらは一時的な盛り上がり過ぎず、継続的には地方活性化が出来ていなかった。このことをきっかけに、音楽フェスを活用した地方活性化に関して分析し、短期の盛り上がり過ぎない音楽フェスからの脱却を実現し、友好的な地方活性化のための音楽フェスに関して研究していきたいと思ったのが、この研究テーマを設定した理由である。

私は、音楽は人間が共通して楽しむことができるコンテンツだと考える。音楽フェスには規模が大きなものから小さなものが存在するが、そこには年齢・性別・人種などを問わず様々な人々が音楽を楽しむために集まる。そのような場では人々が様々な消費活動などを行って、地域の経済にも良い影響をもたらすことが多い。

また、音楽は人々を励ましたり、元気にしたりする効果があると考えている。地方活性化の事例ではないが、1985年に発売された「We Are the World」という曲はアフリカ難民の飢餓救済のために作られ、世界中で大ヒットを記録した。それによって生まれた利益は、慈善事業の資金に使われたという。この曲が世界的大ヒットを記録したのは、人気アーティストが多数参加したという理由のほかに、アフリカ難民の惨状を知った世界の人々が、アフリカ難民の状況を少しでも改善したいという共通の意思を持ち、CDを買ったからであるとも考えられる。

余談ではあるが、音楽が人を元気にするというのを科学的な観点から見て、音楽ライブに通うと幸福感が増し、寿命が延びるという研究結果が出ている¹。この研究の被験者に心理測定テストと心拍数のテストを行ったところ、ライブを観に行くと「自尊心」が25%、「他者との親密性」が25%、「精神的刺激」が75%増加したという²。私はこの音楽から得られる日常生活にはない幸福感というものが、この研究において非常に重要であると考ええる。幸福を求めない人間はほとんどいないであろうし、音楽体験の場でしか感じることでできない非日常感はそれに参加する目的になりうる。

音楽フェスというと、野外の広いステージなどを利用してたくさんのアーティストがライブをするだけの催しという印象が強いかもしれない。しかし、先に述べたように、音楽フェスの開催によって開催地の飲食店や宿泊施設など様々な場所において通常時とは比べ物にならないほどの経済活動が発生し、これは一時的に地方に活性化をもたらす。また、長年音楽フェスを開催していると、その音楽フェス自体にファンがつくという事例もある。その例として挙げられるのが、新潟県魚沼市で行われている「フジロックフェスティバル」であり、詳細については別章にて触れる。また先に述べたように、実際に地方活性化を目的として開催される音楽フェスや、地元を元気にしたり恩返しをしたりすることを願うアーティストが、彼らの地元で音楽フェスを開催するという事例も存在しており、ここ数年で音楽フェスは地方を活性化させる手段として活用されることも増えてきている。

しかし、主催者が地方活性化という目的のために開催した音楽フェスが、その目的を達成することが出来るとは限らないだろう。音楽フェスの参加者はアーティストの音楽を聴きに来ている人が多く、地域貢献したいという思いで音楽フェスに参加する人はほとんどいないと言ってよいだろう。そのような参加層に地域について少しでも興味を持ってもらい、音楽フェスだけではなくその地域のファンになってもらい、活性化につなげていくことが重要である。このことを実現するために、先行研究の検討や音楽フェスの事例の分析などによって、地方活性化のためにどのように音楽フェスを運営していくのがよいか、そしてそれは継続的に地域活性化の方法となりうるかを論じていく。そして、地方活性化の手段としての音楽フェスの在り方をこの研究を通して示していきたい。

以下、第1章では、現在地方が置かれている状況と現在そこで行われている政策などを見ていき、新たな地方活性化事業の必要性を見出ししていく。第2章では、音楽フェスに関して様々な分野の先行研究の検討を行い、音楽フェスの地域活性化の可能性を検証していく。第

¹ THE NEWS News & Views from O2 『Science says gig-going can help you live longer and increases wellbeing』, <https://news.o2.co.uk/press-release/science-says-gig-going-can-help-you-live-longer-and-increases-wellbeing/> (2018年10月現在)

² rockin'on.com 『【科学でロック】ライブを定期的に観に行くと寿命が延びる？ライブ体験で得られる「幸福感」がカギに』, <https://rockinon.com/news/detail/174660> (2018年5月現在)

3 章では、音楽フェスの現状などを検討したうえで、2 つの事例を用いて音楽フェスがもたらしうる地域活性化の効果を見ていく。第 4 章では、筆者が実際に参加し現地調査を行った 2 つの音楽フェスに関して、様々な面から検討していく。

第1章 日本の地方の活性化活動に関して

第1節 地方の状況

日本の地方は多くの問題に直面していると言える。先に述べたような人口減少や若者の都市部への流出がそれである。特に若者の都市部への流出は、高度経済成長期ごろから始まり、長年の地方の問題として地方を苦しめ続けている。若者が都市部へ流出することにより、その地方は人口再生産力を失い、人口減少に拍車がかかってしまう。さらに一部の地方では「地方消滅」という未来まで見えかかっている。例えば、秋田県においては2017年時点で人口は100万人を割り込み、2040年には多くの自治体が消滅してしまう可能性があると言われており、ひとつの地方として存在し続けていくには対策を講じていく必要がある。

第2節 マンネリ化しつつある地方の活性化事業

地方では、先に述べたような問題を解決するために様々な事業や取り組みを行っている。多くの地方自治体は人口流出という問題を抱えているため、その解決のためにUターン事業やIターン事業のような移住政策に力を入れるところが多い。そのため、自治体が打ち出すことのできる政策は限られてきており、地方活性化事業はマンネリ化しつつあるように感じる。似たような問題を抱える地方自治体が行っている移住政策は、人口の取り合いのようになってしまふことがあり、地方自治体同士のつぶし合いのようになってしまっている側面がある。加えて、多くの地方においては「就職先がない」、「地方の地元には魅力がない」などの理由で帰ってくる人や移住者が増加していないというのが現状だ。地元を離れてしまった人が「また戻ってきたい」と思い、その場に残っている人が「これからもここに残りたい」と思うような地域を作っていくことが、地方の存続に重要なことであると考えられる。戻ってきたい地元を作るためには「魅力の創出」が重要になってくると考える。

第3節 新たな地方活性化事業の必要性

現在、地方自治体が行っているようないわゆる「お堅い」活性化事業では、「魅力の創出」を実現することは難しいだろう。そこで、魅力を創出するためには、エンターテインメントの面から地域活性化事業を行うことが効果的であると考え、音楽フェスティバルに注目した。「はじめに」で述べたように音楽フェスは地域経済を活性化したり、人間を幸福にしたりする効果を持っている。音楽フェスは、イベント会社や人気アーティストが主催する場合が多いが、地域活性化を目的に音楽フェスを開催するのであれば、官民共同で音楽フェスを開催することも手段の1つであろう。これらのような、地域活性化のために必要になるであろう事柄について、次章で先行研究をもとにしながら述べていく。

第2章 先行研究の検討

第1節 郊外型音楽フェスティバルと都市型音楽フェスティバルの比較³

音楽フェスの種類は、開催地の面から大別すると、郊外型音楽フェスティバルと都市型音楽フェスティバルの2つになる。この2種類の音楽フェスを、経済波及効果の面から比較・考察した研究がある。この研究の中では、郊外型音楽フェスとして香川県で開催された MONSTER baSH2015⁴が、都市型音楽フェスとして埼玉県で行われた VIVA LA ROCK 2015⁵が比較されている。また、どちらの音楽フェスもチケット販売数が約4万枚と似通っており、規模に関しても比較するのに適している。当該研究においては、2つの音楽フェスに関して、交通費・宿泊費などを含めた消費者関連費やフェスの製作費などが当該研究の調査や計算によって求められ、それを参考に経済波及効果が算出されている。

当該研究の結果によると、郊外型音楽フェスティバルに該当する MONSTER bash 2015 の経済波及効果額は 61 億 7000 万円、都市型音楽フェスティバルに該当する VIVA LA ROCK 2015 の経済波及効果額は 43 億 5200 万となった。これらを単純に金額の面で比較すると、郊外型音楽フェスティバルの方が都市型音楽フェスティバルよりも数値が大きくなっている。当該研究によると、この差が生まれる理由の1つとして、交通費と宿泊費が挙げられている。都市型の場合は、参加者が日帰りになる場合が多く、消費額が少なくなる傾向にある一方で、郊外型の場合は、県外参加者の多くは他県からの遠征に加えて、音楽フェス会場の近辺に宿泊することが多い。それだけではなく、音楽フェス開催県の名所を巡るなどの音楽フェス以外の娯楽においても消費が行われる傾向にある。当該研究によると、このような郊外型音楽フェスティバルにおける消費形態は SIT (Special Interest Tour) ⁶の特性が表れており、旅行としての音楽フェス参加という側面が強い。よって、旅行をしているという感覚から消費も多くなるのだろう。

³ 江藤満正 (2016) 「ロックフェスティバルの経済波及効果比較 ～VIVA LA ROCK

2015 MONSTER Bash2015 を事例に～、2016」, 『尚美学園大学芸術情報研究 25』, P.1-16
を参考に著者が文章作成

⁴ 屋内会場であるさいたまスーパーアリーナで開催されている都市型ロックフェスティバルの1つ。

⁵ 香川県国営讃岐まんのう公園で開催されている郊外型ロックフェスティバルの1つ。

⁶ 特別な目的に絞った旅行のこと。

第2節 音楽フェスにおける協力体制の確立と地域への効果⁷

音楽フェスを継続的に開催することに関して言及している研究がある。当該論文において、音楽フェスを継続的に開催するために必要なこととして、「無駄を出さない」、「再生可能エネルギーを使用する」、「移設可能な設備を使用する」、「関係者との関係を長期的にとらえ、簡単に変更しない」、「地域社会、ミュージシャン、全てのスタッフが相互を尊重する雰囲気を作る」、「地域社会を継続的に改革してゆく姿勢を維持する」の6つを挙げている。音楽フェスティバルの会場は自然が多い環境であることが多く、それへの配慮と人間社会への配慮の両面をバランスよく成立させることの重要性を考慮したうえで、先の6つの提言がなされた。屋外で行われる音楽フェスの場合は、ライブハウスで行うようなライブとは異なり、利潤追求目的のみでは行っていくことはできない。音楽フェス会場の関係者や開催地域の人々、後援団体などとの協力体制を築いていかなければいけないということが示されている。

また、オーストラリアの研究によると、音楽フェスが定期的に開催される地域では、過疎化速度が減少したという研究結果が出ている。これは人口減少が進む地方にとっては注目すべき研究結果である。音楽フェスを有効活用することが出来れば、過疎化を遅らせることが出来るのだ。その一方で、音楽フェスによる効果はポジティブなものに限らず、「開催地域に従来から存在する伝統文化を、音楽フェスが駆逐してしまう危険性がある」⁸とも指摘されている。

第3節 音楽フェス参加者の心理的状況⁹

音楽フェスへ参加する理由としては、出演アーティストを見るためという理由が一般的であり、それが参加者の最も関心のある事項であるという研究結果も出ているが、人間の心理の面から考察すると一概にそうとは言えないかもしれない。ギリシャでの3つの音楽フェスにおける参加者を対象に実施した調査によると、音楽フェスへの参加目的として「音楽を楽しむこと」の次に「現実逃避」が挙げられていた。また、イギリスのある音楽フェスで

⁷ 前掲 江藤の論文と Chris Gibson (2007) 『Transportation in Non-Metropolitan Places, and in Creative Work』, University of Wollongong を参考に筆者が文章作成

⁸ 前掲 江藤の論文より引用

⁹ Julie Ballantyne, Roy Ballantyne, Jan Packer (2014) 『Designing and managing music festival experiences to enhance attendees' psychological and social benefits』 *Musicae Scientiae*, 2014, Vol. 18(1) 65-83 を参考に筆者が文章作成

は、参加者の心理的満足度に関する調査を実施しており、この調査によると心理的な音楽フェスへの来場意図に最も大きな影響を与えたのは「フェスティバル経験」であり、その他の要因としては「音楽経験」、「日常離脱経験」が挙げられている。このように音楽フェスにおいて、「非日常感」という心理状況は非常に重要になってくることが分かる。

先行研究の結果をまとめると、地方において音楽フェスを地域活性化の手段として活用するには、正しい運営方法が必要となる。そのためには適切な開催地の準備、開催地の住民との協力や連携が必要不可欠である。音楽フェスの当日には参加者が現実逃避することのできる「非日常感」を演出できる会場にしなければならない。そして、音楽フェスを成功させることが出来れば、莫大な経済波及効果を生み出すことが出来る。

第3章 音楽フェスティバルと地方での実例

第1節 日本で増加している音楽フェスティバル

音楽系のウェブサイトや雑誌を見ていると、ここ数年間で地方にて行われる音楽フェス数が増加傾向にあると感じることが多い。実際に音楽雑誌「MUSIC」の編集長である鹿野淳氏は朝日新聞の取材に対して「フェスが根付く毛機となったのは1997年に始まったフジロックフェスティバル。ブームが各地に広がり、数年前から地方主体のフェスが増えた」と述べており、音楽フェスが増えた要因としてはCDで聞くよりも、実際に同じ場で音楽やアーティストと直接触れ合いたいという聞き手の考え方の変化があるという¹⁰。

また、音楽フェスによってもたらされる効果が多くあることに主催者が気付き始めたことも、音楽フェスが増加した理由の1つではないかとも考える。地方で行う音楽フェスにはその地域における消費であったり、フェスの参加者に地域のことを知ってもらえるということであったりと、様々な効果が見込めるだろう。堺都市政策研究所が12の地域密着型音楽フェスの主催団体に行った調査によると、「地域における消費（飲食や買い物への波及）」、「地域における人との交流」という点について、音楽フェス主催者団体が双方を同じ程度重視しているという。しかし、達成度に関しては12団体のうち4件のみが「達成した」と回答するにとどまり、残りの団体は「どちらともいえない」、「あまり達成していない」と回答した¹¹。目的はしっかりとしているものの、その達成までには至っていないというのが現状であるようだ。また、主催者でだけでは音楽フェスは開催できない。それに足並みを揃えて協力してくれる地域住民や協賛団体がいる。彼らの存在は非常に重要で、音楽フェスを通して地域活性をしていくにあたって、無視できないものである。

第2節 地方密着型音楽フェスティバルの地域への貢献

実際に音楽フェスティバルが地域活性に貢献している例はすでにいくつか存在する。例えば、長野県で行われている「りんご音楽祭」であったり、北海道の小樽で行われている

¹⁰ 前掲 江藤の論文

¹¹ 財団法人 堺都市政策研究所、『市民主体の地域活性化（音楽イベントを通じたまちおこし）に関する調査研究業務 報告書』の資料を参考に筆者が文章作成

http://www.sakaiupi.or.jp/30.products/31.resarch/H22/H22_music.pd, (2018 年 6 月現在)

「RUISING SUN ROCK FESTIVAL」であったり、決してアクセスが良いとは言えない場所で開催されている音楽フェスティバルにも、多くの人が訪れている¹²。これらの音楽フェスには、地域の良さを発信したいなどという地域活性の役割を果たしたいというマインドがある。そのため、ただの音楽好きによる音楽フェスに終止するのではなく、地域を知ってもらふブースであったり、地域の特産品を食べることのできる店舗が出店されたりと、地域活性のためにできることが展開されている。これらのような主催者の努力によって音楽フェスを通した地域の発信が行われている。

その一方で効果が期待できない点もいくつかある。音楽フェスは短期間で行われるものがほとんどである。そのため音楽フェスが開催されている期間は地域活性が期待されるが、それ以外の期間はほとんど地域活性の効果が無いと言える。地方が成長または復興していくためには、中長期的に効果のある取り組みが必要であると考え。音楽フェスそのものだけで地方へ中長期的に効果を与えていくことは難しいので、音楽フェスによるオプション効果として中長期的なものを作り上げていく必要があると考える。

(1) フジロックフェスティバルの事例¹³

音楽フェスが地域活性化に貢献している事例として真っ先に挙げられるのが、おそらく「フジロックフェスティバル（略してフジロックと呼ぶ）」であろう。この音楽フェスは、1997 年から新潟県の苗場スキー場で行われている歴史の深いものである。都心からのアクセスは悪いが、毎年 10 万人以上の人々がこの音楽フェスティバルに足を運んでおり、経済効果は 30 億円以上といわれている。

先に述べたように、音楽フェスの地域活性化の効果は、それが開催されている期間だけにとどまってしまう、一過性のものになってしまう場合が多い。音楽フェスの期間内には、音楽フェスの会場近くの宿泊施設や飲食店、小売店が音楽フェスに訪れる人々で賑わうのはもちろんのことである。しかし、このフジロックは一過性の地域活性化ではなく中期的な地域活性化が実現されていると言える。

フジロックの出場者や関係者は、当該フェスが開催される 1 ヶ月以上前から現地入りしている。そして、ステージ設営や事前準備を行い、フジロックの当日に向けて地域の宿泊施設に泊まり、設営の休憩には苗場の町に出て、そこにある店で食事をする。このように、短期ではなく中期的な地域での消費が生まれている。また、ただ単にその場所でフジロックを開催しているだけではなく、主催者とそこに住む住民との関わりもある。会場である苗場

¹² Original Conidence 『町おこしとの連携で独自に進化する音楽フェス』を参考に筆者が文章作成、<https://www.oricon.co.jp/news/2041790/full/>（2018 年 4 月現在）

¹³ HUFFPOST 『音楽フェスは地域をどう変えたのか』、https://www.huffingtonpost.jp/ryushi-osaki/music-festival_b_11097940.html（2018 年 5 月現在）を参考に筆者が文章作成

スキー場でフジロックが始まると決定した際には、地域住民にとって音楽フェスティバルは未知の催し物であったために、犯罪などを危惧してフジロックの開催に対して反対意見が上がったという。そんな状況を打開するために、フジロック主催会社である SMASH のスタッフ達は、住民と食事をしたりゴルフを楽しんだりすることによって、住民たちとコミュニケーションを深めていき、信頼を得ていった。これはコミュニティデザインの実践である。それが地域住民と主催者の信頼関係の構築に繋がり、フジロックの開催にも繋がった。今でも彼らの交流は続いており、毎年前夜祭には苗場の住民を招いて「苗場音頭」という祭りを開催している。フジロックは観客やアーティストだけではなく、地域の人たちのためのものでもあるという思いも強くあり、それが 20 年以上もフジロックを続けて開催できている理由の 1 つであると考える。

そして、フジロックには「フジロッカーズ」と呼ばれるこのフェスそのもののファンが存在し、彼らは地域とのかかわりを深めている。例えば、ステージ会場同士をつなぐ「ボードウォーク」というものがフジロックの会場にあるが、それは観光協会と地域住民、そしてフジロッカーズが協力して作り上げたものである。他の音楽フェスでは主催者主導で名物のようなものを作ることはあるが、ファンや地域住民が一体となって物事に取り組むということとはあまり見られない。また、フェスの楽しみの一つである飲食コーナーには、苗場観光協会の人々が運営する「苗場食堂」というものが出店している。そこでは、地元の食材を中心に味噌や醤油を使ったシンプルな郷土料理が販売されており、地産の食材を使用し音楽フェスティバルという大規模な範囲で消費することによって、生産者の利益を生み出している。このように、フジロックは単なる音楽フェスティバルではなく、誰もが参加しやすい音楽業界発の「まちづくり」として存在している。

(2) 私立恵比寿中学秋田分校の例

次に全国規模で活動する私立恵比寿中学というグループが行っている、「私立恵比寿中学秋田分校」の事例に関して述べていく。この私立恵比寿中学の秋田分校は、当該グループのメンバーが、ABS 秋田放送のラジオ番組である「タマリバ！」の準レギュラーであることをきっかけに秋田県内で開催されるようになったコンサートであり、2018 年時点で開催されるのは 3 回目になる。初回は単なる「秋田県でのコンサート」のようなものだったが、回数を重ねるごとに規模は拡大し、今年開催された秋田分校は、秋田県を巻き込んだ大きなイベントとなっている。

この「秋田分校」は、先に述べたフジロックフェスティバルのように広大な土地で開催されているわけではないが、より地域に密着したイベントとして地域に貢献している。秋田分校が地域貢献に役立っているであろう事例の一部を以下より箇条書きで紹介していく。

・秋田駅前にエビ中のパネルを設置しお祭りムードを高めた。

- ・秋田分校文化祭と銘打ち、秋田県のローカルアイドルなどが出演するフリーライブを行った。
- ・秋田分校映写室と銘打ち、期間限定で上映された私立恵比寿中学の映画を秋田県内の映画館で上映した。
- ・秋田分校図書室と銘打ち、ジュンク堂秋田店にて私立恵比寿中学関連の書籍を、入手困難となっているものまで入荷し、大型特設コーナーとして運営した。当該店舗の公式Twitterによると売れ行きは非常に良かったという。
- ・秋田分校市場と銘打ち、秋田駅ビルのトピコにて、秋田分校チケットを見せるだけで、お土産がもらえたり、商品を割引価格で購入出来たりと、様々なおもてなしを受けることが出来るキャンペーンを開催した。
- ・秋田分校の会場である秋田県立体育館に飲食ブースを展開し、そこで横手焼きそばや鮎の塩焼きなどの秋田県の名産品を販売した。
- ・ABS 秋田放送で、私立恵比寿中学が地元の人との触れ合いや秋田の魅力を発信することをテーマにしたテレビ番組を放映し、ファン以外の人の目にも留まるように工夫していた。また、その番組を無料動画サイトの『GYAO!』で配信し、秋田県に住む人以外にも秋田県の魅力を伝えるための工夫をした。
- ・たけや製パンという秋田県内のパン会社と協力し、私立恵比寿中学のメンバーが味やパッケージをプロデュースしたパンを発売した。また、それを東京都にある秋田県のアンテナショップでも販売した。

上記のような取り組みの効果も出ており、秋田経済新聞によると、2017年に開催された秋田分校の経済波及効果は1億円にも上ったという¹⁴。このデータに関して詳しく知ろうと思い、このデータを算出した秋田経済研究所に情報提供を求めたが、そのデータの中には、ABS 秋田放送が権利を持つマル秘データも含まれているということで、残念ながら詳細に関しては知ることが出来なかった。しかし、秋田分校の経済波及効果が1億円であることは間違いなく、今後も様々な団体などと協力をしつつ継続的に開催していくことで、さらに大きなスケールで秋田県を巻き込んだ秋田分校に成長し、さらなる経済波及効果や地域発展への貢献が見込めるかもしれない。

¹⁴ 秋田経済新聞 「秋田で『エビ中』がコンサート PR 金足農・吉田投手ポーズ決め意気込み」、2018年9月5日に掲載されているデータより

第4章 地方で開催される音楽フェスティバルでの実際

第1節「ROCK INN JAPAN FESTIVAL 2018」での実感

私は2018年の8月4、5、11、12日に茨城県ひたちなか市の国営ひたち海浜公園にて開催された、「ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2018」（以降ロッキンと呼ぶ）11日、12日に参加し、現地調査を行った。このフェスは2000年に開催されてから現在まで続く日本最大級の野外音楽フェスであり、2017年に開催されたロッキンには、4日間で延べ27万4000人が参加したという¹⁵。

ロッキンが地域活性化の面で貢献している点として挙げられるのは、開催地域における消費を促進している点だろう。その近辺の地域では飲食や宿泊など、ロッキンの参加者による消費活動が行われる。実際に、会場近辺のコンビニエンスストアではアメニティグッズを買い求めるロッキンの参加者や、飲食店では待ち客が出来るほどの混雑具合であった。宿泊の面に関しては、会場近辺や最寄り駅のホテルなどは連日大盛況であり、会場近辺のインターネットカフェもロッキン宿泊プランを組んで営業していた。特に、インターネットカフェでは、通常はダーツやビリヤードなどの遊戯場として営業している場所を開放し、その場所に雑魚寝で宿泊できるように、需要に対して柔軟に対応していた。

また、ロッキン開催日は1つの会場に数万人が集まるため、どうしても駐車場が足りなくなってしまう。そのため、会場付近の私有地を有効活用し、有料駐車場として開放している住民が何人もいた。それらの有料駐車場もほぼ満車であり、会場付近のコインパーキングの利用もおおのずと促進されていた。

交通に関しては、会場の最寄り駅である勝田駅と水戸駅から会場まで、茨城県のバス会社である茨城交通が運営する有料シャトルバスを運行しており、相当数のフェス参加者がこのバスを利用していた。水戸駅発の往復運賃は1340円、勝田駅発の往復運賃は770円であり、茨城交通には相当な利益がもたらされたと予測される。

ロッキンの会場内においては「ひたちなか市場みなと屋」というひたちなかの有志たちが運営する飲食エリアがある。そこでは野菜や海産物、地酒・地ビールなどの地元の特産品が販売されている。また、他の飲食エリアにて販売されている「メロンまるごとクリームソー

¹⁵ WWS Channel 『B'z、桑田佳祐、サカナクション、RADWIMPSら豪華出演陣に27万4000人が熱狂！ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2017 終演！』のデータより
<http://www.wws-channel.com/music2/44320.html?view=more>（2018年11月現在）

ダ¹⁶」は、非常に人気を得ており、ロッキンの名物となっている。現在では茨城の名物にまで成長した。日本一の生産量を誇る茨城県産のメロンを宣伝するために、2008年のロッキンで初めて販売されたこの商品であるが、販売当初はメロンを調達することが出来ずに赤字を出していた。しかし、この商品に興味を示す業者も年々増加し、協力を得ることによって現在のような人気を誇っている。私が参加した日も、このメロンソーダが販売されている屋台には、これを求める参加者が長蛇の列を作っていた。

ロッキンに参加して最も感じたことは、「非日常感」である。東京ドーム13個分もの広さの会場を動きまわりながら、1日を通して音楽体験をすることは日常生活では全くないだろう。この非日常体験の中では人間は幸福を感じざるを得ない。その影響なのか、財布の紐もゆるくなってしまう人が多く見られた。アーティストのグッズを大量購入している参加者がおり、会場外でもそれは例外ではなく、飲食店では小さな打ち上げのようなことをしているフェス参加者もいた。これらを踏まえると、ロッキンは地域経済への経済波及効果、フェス参加者への「非日常感」の提供において、十分な効果をもたらしていると考えられる。フェスとしての歴史も深くなってきており、今後もさらなる地域活性化の効果が期待される。

第2節 「MIYA JAZZ INN 2018」での実感

ミヤジャズインとは、宇都宮市の地域資源であるミヤ・ジャズ（軽音楽）を活用し、中心市街地への集客、観光誘客、消費拡大などを促進させ、地域産業の振興及び地域文化の向上に資することを目的にし、ジャズを通じて宇都宮から日本全国へ文化を発信するために開催されている音楽フェスである¹⁷。宇都宮市は有名なジャズアーティストを多数輩出している。そのような特性を活かし、宇都宮市にゆかりのあるアーティストを主とし、各地の有名ジャズアーティスト、そしてアマチュアアーティストが集結し、1974年から続くミヤジャズインで「ご当地ジャズ」を奏でている。また、ミヤジャズインは官民共同で運営されるフェスであり、参加者と主催者双方の意見を反映した取り組みが行われている。加えて、「ジャズのまち宇都宮」を更に発信するために、当該フェスを「宇都宮餃子祭り」と同日に開催したり、出店で宇都宮カクテルや餃子などの宇都宮市の名産品を販売したりと、宇都宮市の地域資源を総合的に発信しようと試みている。

私は地域活性化を目的として行われている音楽フェスを実際に体感するために、2018年

¹⁶ 種を取って冷凍した2リットルサイズのメロンにソーダを注いでその上にバニラアイスに乗せた、ロッキンの名物。価格は1000円程度

¹⁷ ミヤ・ジャズ推進協議会『MIYA JAZZ INN』公式ウェブサイト、
<http://miyajazz.jp/index.html>（2018年11月現在）を参考に筆者が文章作成

の11月3日、4日に栃木県宇都宮市で開催されたミヤジャズインの2日目（4日）に参加してきた。以下に、私が当該フェスに参加して理解したことや感じたことを記していく。

本年のミヤジャズインのテーマは「マイ・フェイバリットソング」ということで、栃木県内外から66グループが「マイ・フェイバリットソング」を演奏するためにミヤジャズインに集結した。

2日目のミヤジャズインは午前11時からの演奏開始ということで、その時間の少し前に会場に着いた。会場は、「オリオンスクエア会場（オリオン市民広場）」、「オリオン通り曲師町イベント会場」、「オリオンACぶらぎ会場」、「東武宇都宮百貨店6階屋上特設会場」の4つがある。各会場はオリオン通りという宇都宮市の中心地にある商店街内やその付近にあり、サーキットイベント¹⁸のように会場間で迷うことなく移動できるように工夫がされている。

まずはそのオリオン通りを歩いてみると、通常の土日の賑わいと比較し、私の体感では通常の3倍ほどの賑わいであった。もちろん人通りはいつも以上に多く、それに加えてオリオン通り内にはフリーマーケットなども出店しており、それも相まって更に活気あふれて見えた。お昼時には出店だけではなく、オリオン通り内にある店舗も忙しそうにしていた。また、オリオン通り内の居酒屋も、出演者の打ち上げなのか、お昼時にしてはなかなかの盛り上がりを見せていた。特に本年のミヤジャズインは宇都宮餃子祭りだけではなく、宮の市（商業祭）¹⁹、宇都宮ジャズクルージング²⁰と同時が開催されていたため、これらのイベントに参加していた人々も、「近くで開催されている」、「手軽に音楽体験をしたい」などの理由でミヤジャズインに顔を出していたのであろう。

続いて、各会場におけるライブでの雰囲気や状況に関して述べていく。全体の雰囲気に関しては非常にアットホームで居心地がよかったと思う。大型の音楽フェスであるような、いわゆる「場所取り合戦」のような殺伐としたものではなく、非常に安心して演奏を見ることができる。また、ジャズという音楽ジャンルのせいもあってか、参加層は比較的高齢であった。この点を考慮すると、各ステージの移動距離が長かったように思える。同じ商店街の近くにステージがあると言えど、決して距離が近いわけではなく、利便性をさらに追及していくのであればこの点は改善が必要であると感じた。また、飲酒をしているグループがいくつか

¹⁸ 1つのライブ会場だけではなく、複数の会場を利用して地域が一体となって行うイベントのこと

¹⁹ 宇都宮市内の商店街の活性化を目指し開催されるイベント。伝統工芸品から日用品まで様々なものが販売されている。

²⁰ 宇都宮ジャズ協会という団体に加盟している店舗（ジャズライブハウスなど）の中で行われるジャズライブイベント。チケットを持っていれば、加盟店舗をクルーズ（周遊）することが出来る。

あり、そのグループが演奏中に大声で話したり、ステージの出入り口をふさいだりとマナー上では良くない行為が見られた。これらの点に関しては「宇都宮はこんな町なのだ」というような悪い印象を市民にも県外からの参加者にも与えかねないので、地域活性化のための音楽フェスであれば、地域イメージのためにも改善が必要であろう。その一方で、車いすの参加者のためにスタッフがライブを見やすい場所に案内したり、移動の補助をしたりと、どんな人でも楽しめる環境づくりのための努力が見られた。この点は大型の音楽フェスではできないことであるので、小型フェスならではの暖かさの維持のためにも続けていってほしいと感じた。

ただ、ミヤジャズインのフィナーレには疑問を持たざるを得なかった。どのようなフィナーレだったかというと、最後のグループの演奏終了後、司会者が登場し参加者への感謝を述べて終了というようなものだったが、あまりにも淡泊すぎるものであり、正直「これで終わりなのか？」と感じてしまった。地域活性化や地域の発信を目的としている音楽フェスであれば、宇都宮市やオリオン通りへの情熱や愛情を手短に語ったり、会場近くのお店の宣伝や宇都宮の発信を端的に話したりしてもいいのではないかと思った。主催者側から目的の意図が感じられなければ、演奏する人々やフェス参加者の熱も冷めかねないので、その部分はもう少し徹底するべきだと感じた。

個人的には改善点も見られたが、小規模で開催されるフェスとしては地方（商店街）への経済波及効果もある程度は見込め、「非日常感」においては地域密着型の音楽フェスのため感じ方には個人差があると考察した。小規模の音楽フェスの中では歴史あるものになりつつあるので、その歴史に恥じないように、今後はさらなる改善を施し、開催日だけにとどまらない地域活性化の効果を期待したい。

おわりに

ここまで、音楽フェスティバルに関して様々な視点から、検討・分析を行ってきた。

第1章では、衰退する地方において、地域活性化の面から「魅力の創出」が必要であると分析し、新しい地方活性化事業である、音楽フェスティバルの活用を提案した。

第2章では、先行研究の検討を行い、音楽フェスティバルの開催によって過疎化速度を遅らせることが出来ること、地方における音楽フェスティバルの運営方法、そして音楽フェスティバルに参加する人々は、「非日常感」を求めていることなどを見てきた。

第3章においては、音楽フェスティバルの地域貢献の一例を見てきた。フジロックにおいては長年の開催でこそ可能になった中長期的な地域活性化、私立恵比寿中学の秋田分校においては、1アーティストによる地方活性化の事例を見てきた。

第4章においては、筆者が実際に参加した2つの音楽フェスティバルに関して、現地調査を行い、その結果や音楽フェスティバルでの状況を述べた。

ここからは本論文のまとめを述べていく。

「ROCK INN JAPAN 2018」や「MIYA JAZZ IN 2018」の事例で見てきたように、音楽フェスには地方に対して一定程度の経済波及効果は期待できる。しかしフジロックなどの特殊な例を除いて、その経済波及効果は一時的なものに終止してしまう場合が多いだろう。ミヤジャズインにおいては、フェスの直後の日にも会場に足を運んだが、とても前日にフェスがやっていたとは思えないほどの状況であった。当然と言えばそうなのだが、自分が予想していたよりも小規模の地域密着型音楽フェスの地域活性効果は一時的なものであり、非常に残念に感じた。私の提案としては、フェスの翌日も反省会や後夜祭のような扱いでイベントを開催したり、定期的に関連イベントを開催したりと運営方法を熟考していけば中期的に地域活性化の効果をもたらすことも可能かもしれない。

また音楽フェスは、参加者に非日常感を与えるという面では非常に効果的なものである。非日常感の体験は、また地方の音楽フェスに参加したいという意欲をもたらすだけでなく、フェス参加者の消費を促進したり参加者に幸福感をもたらしたりする。地方の音楽フェスにおいてこの非日常感をより多くの人に感じてもらうには、ロッキンでいう写真撮影スポットやオブジェを作るなど「そこでしか味わえない何か」を見つけていく必要がある。例えば、音楽フェスは夏に行われることが多いので、あえて冬に開催して雪の中で音楽体験をするという音楽フェスがあっても面白いかもしれない。雪の中での交通手段、温度管理、天候不順など解決していくべき問題はたくさん発生するであろうが、冬に開催という物珍しさから、一定程度の参加者は見込めるかもしれない。

長期的な地域活性化の方法として音楽フェスを検討してきたが、正直、その実現は非常に困難で、地方における衰退の根本的な解決方法としては有効ではないと考えられる。

しかし、正しい協力体制の構築や運営をすることができれば、地方活性化を実現し、衰退してしまった地方を活気のある町・魅力あふれる街に戻すことのできる手段になり、フジロックのように長年継続的に音楽フェスを開催していくことによって、中期的に莫大な経済波及効果を生み出すことも可能である。そして、地域活性化のためにはアーティスト、主催者、フェス参加者が1つになって、地方と音楽を楽しむことのできるフェスが理想である。

あとがき

私にとって卒業論文の作成は非常に過酷なものとなった。私の卒業論文のテーマである「音楽フェスティバルによる地方活性化」に関する国内の先行研究が非常に少なかったからである。これは卒業論文作成を始めてすぐにぶつかってしまった課題であり、テーマの変更も検討されたものの、「音楽を用いて地方活性化につなげる方法を見つけない」という強い思いをもって卒業論文作成をなんとか続けることが出来た。その甲斐あってか、外国のものではあるものの、自分の求めるような内容を記した先行研究を数本見つけることが出来たので、その点に関しては非常に良かったと思う。それらの先行研究の論文は、長いうえに内容も非常に専門的で途中で読むことをあきらめそうにもなったが、研究結果の中には日本国内の音楽フェスティバルの事例とも一致する部分があり、それを発見したときは非常に達成感を感じた。

また、卒業論文の作成によって、研究にあまり関係ないことに関しても新たな発見があった。私立恵比寿中学の秋田分校に関しては、ROCK INN JAPAN のような大型野外フェスティバルではないので、失礼ながら「ただのライブ」というように思っていたが、調査をしていく中で、本文中で述べたように秋田県に非常に貢献していることが分かり、1アーティストの持つ力を思い知った。本人たちもこの催しには思い入れもあるようで、アーティストと地方が良い関係を築けている良い例であると思った。

様々な理由で必要であったデータが得られなかったり、多くの先行研究を分析できなかったりと、正直に言うと満足にテーマの分析が行えているとは思うことはできないし、十分な卒業論文が作成できたとは言えない。若干悔いの残るような、卒業論文にはなってしまったものの、なんとか書き切ることが出来たことに関しては安心している。今後このテーマに関しての研究が深まり、更に地域活性化のための音楽フェスティバルが開催されるようになることを祈っている。就職後も、可能であればそのような音楽フェスティバルに参加し続けていき、地方でのフェスを楽しんでいきたい。

最後に、中村祐司先生や行政学研究室のメンバーには非常にお世話になった。日ごろから良くしてもらったり、約1年前の提案会で協力し合ったりと、自分にとっては非常に居心地の良い研究室であった。もちろん卒論作成においてもたくさんの助言をいただき、非常に自分のためになった。この場を借りて謝意を示したい。

参考資料

論文

- ・ 江藤満正 (2016) 『ロックフェスティバルの経済波及効果比較 ～VIVA LA ROCK 2015 MONSTER Bash2015 を事例に～、2016』, 尚美学園大学芸術情報研究 25, P.1-16
- ・ 財団法人 堺都市政策研究所 (2011) 『市民主体の地域活性化 (音楽イベントを通じたまちおこし) に関する調査研究業務 報告書』, 公益財団法人 堺都市政策研究所, http://www.sakaiupi.or.jp/30.products/31.resarch/H22/H22_music.pdf, (2018 年 6 月現在)
- ・ 西田浩 (2007) 『ロック・フェスティバル』, 新潮社
- ・ Chris Gibson (2007) 『Transportation in Non-Metropolitan Places, and in Creative Work』, University of Wollongong
- ・ Julie Ballantyne, Roy Ballantyne, Jan Packer (2014) 『Designing and managing music festival experiences to enhance attendees' psychological and social benefits』 *Musicae Scientiae*, 2014, Vol. 18(1) 65-83
- ・ Stive Okase (2010) 『Profiling the Jazz Festival Audiene』 *International Journal of Event and Festival Management* 1(2):110-119 .

新聞

- ・ 秋田経済新聞 『秋田で「エビ中」がコンサート PR 金足農・吉田投手ポーズ決め意気込み』, 2018 年 9 月 5 日

ウェブサイト

- ・ 産経ニュース「夏の名物メロンまるごとクリームソーダ 茨城県産に「魔法」かけ続け 11 年」, <https://www.sankei.com/life/news/170620/lif1706200022-n1.html> (2018 年 11 月現在)
- ・ 総務省「地方圏の現状」
www.soumu.go.jp/main_sosiki/kenkyu/teizyu/pdf/080121_1_si3.pdf (2018 年 4 月現在)
- ・ ミヤ・ジャズ推進協議会「MIYA JAZZ INN」公式ウェブサイト,
<http://miyajazz.jp/index.html> (2018 年 11 月現在)

- ・フジロックの森プロジェクト「みんなの森で再生と活用を目指す フジロックの森プロジェクト」, <https://www.fujirockersforest.com/>, (2018 年 11 月現在)
- ・HUFFPOST 『音楽フェスは地域をどう変えたのか』,
https://www.huffingtonpost.jp/ryushi-osaki/music-festival_b_11097940.html (2018 年 5 月現在)
- ・Original Conidence 『町おこしとの連携で独自に進化する音楽フェス』,
<https://www.oricon.co.jp/news/2041790/full/> (2018 年 4 月現在)
- ・rockin'on .com 『【科学でロック】ライブを定期的に観に行くと寿命が延びる？ ライブ体験で得られる「幸福感」がカギに』, <https://rockinon.com/news/detail/174660> (2018 年 5 月現在)
- ・WWS Channel 『B'z、桑田佳祐、サカナクション、RADWIMPS ら豪華出演陣に 27 万 4000 人が熱狂！ ROCK IN JAPAN FESTIVAL 2017 終演！ 』, <http://www.wws-channel.com/music2/44320.html?view=more>, (2018 年 11 月現在)

その他資料

- ・MIYA JAZZ IN 2018 公式パンフレット
- ・ROCK INN JAPAN 2018 公式パンフレット